

巻頭言

三歳児保育の課題

千羽 喜代子

我が国の幼稚園三歳児の幼児数の変動を文部科学省「学校基本調査速報」で調べると、昭和六十年代から、その比率は、一〇・二パーセントと二桁となり、以後、漸次上昇し、平成十三年度では二十一・八パーセントと二倍強となっている。全園児数の五分の一強は三歳児で占められていることになる。

その背景には、社会的要請の高まっている三歳児の就園促進を含めた幼稚園教育第三次振興計画（平成三年から十年間）での目標であった「入園を希望するすべての三〜五歳児が就園できる機会を確保すること」が、あったものと考ええる。

一方、保育所においては、非常に大まかに見たとき、昭和四十年の中頃から一〇パーセント



台の二桁となり、平成九年頃では二十三パーセントに上昇、以後、横這いの状態で現在に至っている。

現在では、幼稚園も保育所も約二十パーセント強の三歳児が在園していることになる。

省みると、保育所三歳児クラスが二桁になろうとしていた頃、故秋田美子先生（明治四十年（昭和四十二年））は、談話の中で、また三歳未満児保育に関する講演の中で、盛んに、二歳児クラスから三歳児クラスに移行するさいの問題点を投げかけていられたことが思い出される。

保育所における保母定数（当時の用語を使用）において、保育者一人に対する二歳児の割合は、昭和三十九年一対八人、四十一年一対七人、四十二年一対六人となり、以後その割合は変わっていない。

これに対して保育所三歳児の場合は、昭和三十一年一対三十人、四十三年一対二十五人、四十四年一対二十人となり、現在に至っている。

一見した、この二歳児と三歳児の保母定数から、秋田美子先生が何を私たちに伝えようとしていられるかが推測できよう。二歳児クラスから三歳児クラスに移行する幼児たちにとって、このような大きな相違を示す保育の環境条件を考慮したとき、その移行に際しては、中間段階を置くくらいの細やかな配慮を幼児たちに向ける必要があると教えられたのである。

現在の幼稚園三歳児学級に目を転じよう。先にもふれたように、最近では各園において三歳



児の在園児数は年々増加の傾向にある。また、よほどの地域事情のない限り、三歳児学級が設置されていない園は稀である。これに加えて、満三歳児就園が実施されはじめている。

しかし、平成七年に一部改正された幼稚園最低基準では、画期的な改正とうたわれた一学級の幼児数、すなわち、幼児一人一人の発達に応じ、行き届いた教育を推進するため、一学級の幼児数を四十人以下の原則から三十五人以下の原則に引き下げたとは言え、三・四・五歳児各一学級の幼児数は、いずれも一律である。もつとも、三歳児学級の担当幼児数は各園の教育的配慮にまかされているが……。

ここで確認したいことは三歳児学級（在園児数）が増加しているという現実である。

また、最近入園してくる三歳児たちの姿にふれたとき、果たして子ども集団を活かした園生活が可能であるか、むしろ早すぎるのではないかとさえ考えたくなる幼児が少なくない。

以前であれば、親はわが子が集団生活に適応していけると判断した時点で幼稚園入園を決め、また、そのような指導がなされてきたのであるが、現今ではこの判断はすでに通用しなくなっている。

平成十六年、日本保育学会第五十七回大会において、栗原ひとみ氏は、「幼稚園三歳児一学期をどう捉えるか」と題して、同一幼稚園の過去十年間の保育実践記録の資料から、入園した三歳児一学期の姿の変容を報告された。生活リズムの乱れ、排泄の自立の遅れ、自己コントロール能力の弱さなどが指摘された。



また、関口はつ江氏らの報告でも（同年同学会で報告）、昭和四十四年、丁度三十五年前になるが、日本保育学会で行った幼児の精神発達の調査項目から選択した、知的・運動的・情緒的・社会的発達に関する一〇四項目によって、幼稚園三・四・五・六歳児二〇二四人を対象に調査を行ったところ、全般的に三歳児の発達に遅れのあることを認めた。この調査は六月に施行したため、三歳児の入園二カ月後の発達を調べたことになる。ここには対象三歳児の発達に家庭生活での環境条件が大きく作用していることが考えられる。

そして一・二年と園生活を経験している四歳児以上の幼児たちには、発達の遅れは、それ程顕著ではない。この調査結果から、入園後の幼稚園教育の効果を讀みとることができるのである。

保育現場では、「入園してくる幼児たちが変わった」という声を耳にする。入園児幼児たちの様態の変容は、三歳児の保育を見直す機会として受けとめる必要があるのではないか。明らかな問題行動があるとは言えないが、保育者たちにとっては、信頼関係を築くための個別に長時間を要する子どもが増えていると言う。しかしその後の保育効果は期待できるのである。

家庭との連携をより一層密にしながら、きめ細かい保育のできる一学級の保育者一人に対する幼児数の再考、三歳児の実像にあわせた保育、例えば集団化を急がないこと、がさしあたっての課題となろう。